阿嘉島海中ガイド

阿嘉島臨海研究所

沖縄の西方約 40km の海上に浮かぶ慶良間の島々。

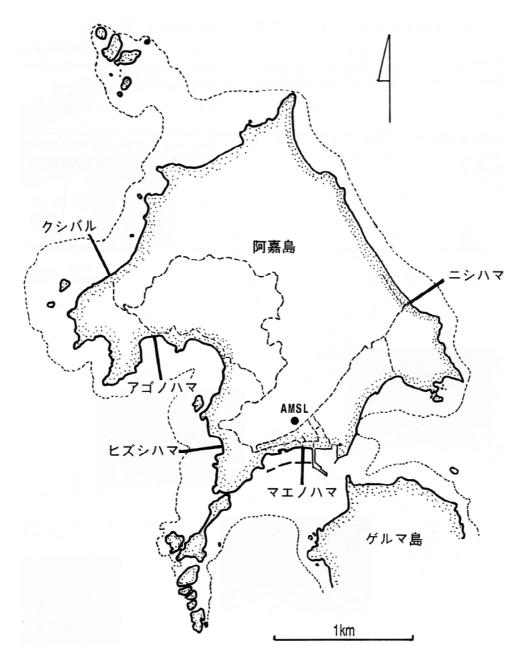
そのなかの一つである阿嘉島は、世界で三番目に美しい海を持つといわれている。

そして、その手つかずの海中は、様々な生物の宝庫でもある。

今回は、この阿嘉島の海を研究用のフィールドとして利用してもらうために、

アプローチが比較的容易でスキンダイビングによっても生物の観察と採集が可能な5地点において、

底質、生物調査を行ったので、その結果を紹介する。



調査は1990年7月28日~30日の間に行った。

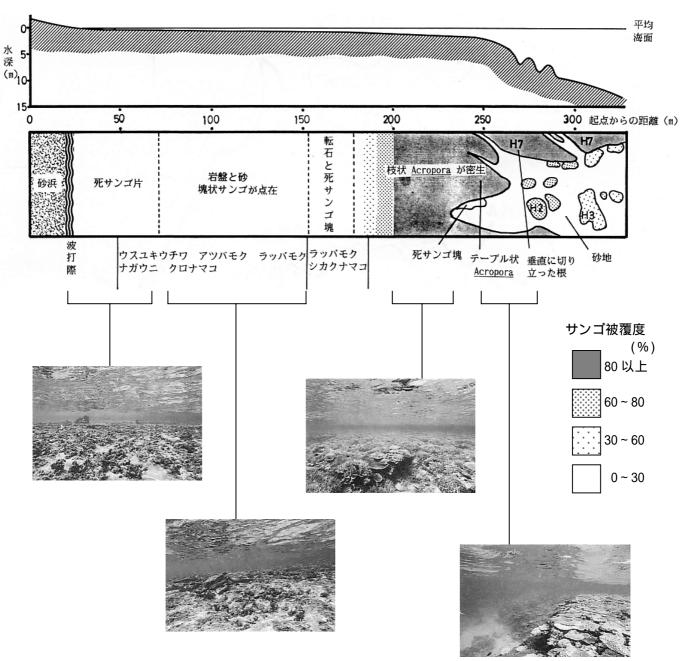
調査点においては、海岸に通ずる道の出口を起点にとり、そこから沖に向かって 300m 前後のラインを引いた。 ラインは各地点の特徴をよく表している部分を通るようにし、調査はこのラインに沿って行った。

クシバル

島を走る道路の西端にある全長約1kmの砂浜。岸から沖に向かい200mほどは満潮時でも背の立つ深さが続く。 大潮の干潮時には完全に干上がり、地元のおばさん達は食料の調達に訪れる。これを"いざり"と呼んでいる。 食べられるものは片っ端から取ってしまうので、ここでサンプリングをするときは、彼女達と早起き競争をしなければならない。

リーフエッジはノコギリの歯のように鋭く凸凹し、また 5~10m の切り立った根となっている。サンゴの被覆度は非常に高く、コウイカも見られることが多い。

(上図は下図の中央部断面。起点は海岸へ通じる道の海側口にとってある。)

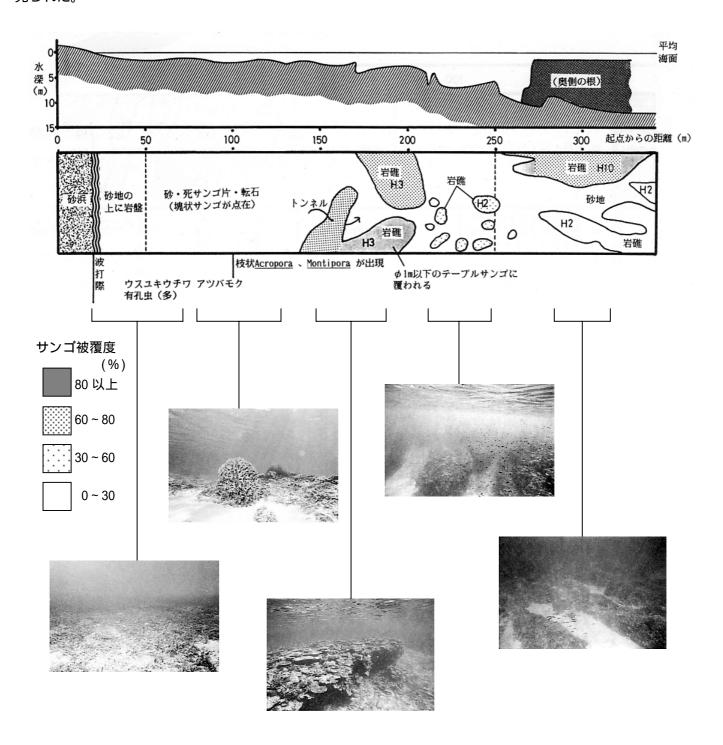


注:図中の H10 は海底面より 10m の高さを表す。 D2 は水面より 2m の水深を表す。

ヒズシハマ

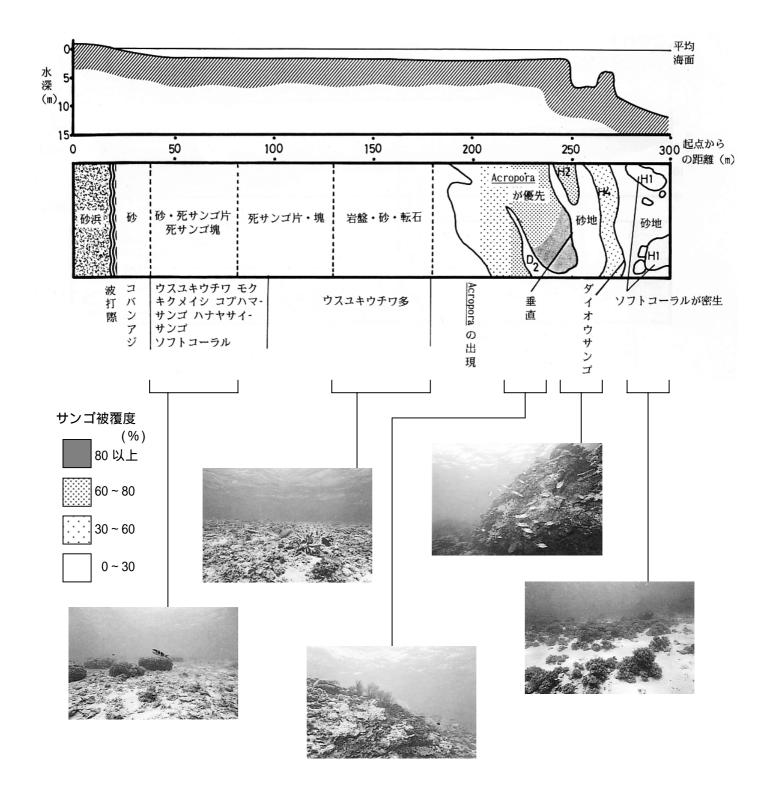
阿嘉島村落の西端に位置し、研究所から歩いていける範囲にある。小さな湾になっていて、中央部は砂浜、両端は岩礁となっている。沖に向かって泳いでいくと、150m 位までは、砂地に海藻が生え、小さい塊状サンゴが点在する程度の単調な海底景観が続くが、それを過ぎると比較的サンゴ被覆度の高い根が現れる。

さらに沖に向かって進んでいくと、砂地の海底から垂直につき出た背の高い根がいくつも現れる。この辺りの 海底地形は複雑になっていて、洞窟やトンネルなどが多い。今回の調査中には、ここでハマフエフキの大群が 見られた。



ニシハマ

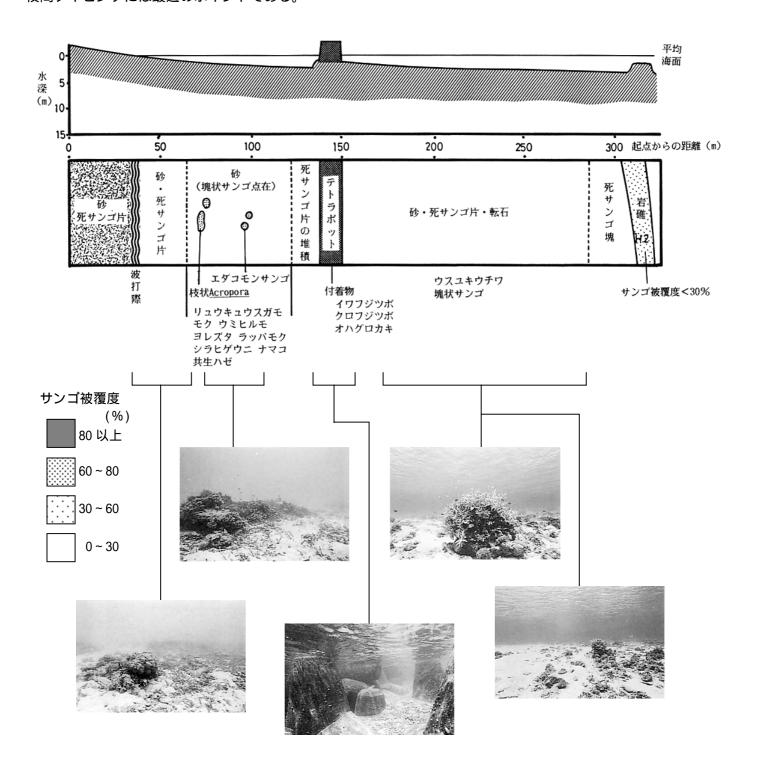
島の北東側の海岸は"ニシハマ"と呼ばれる。これは沖縄の方言で北のことを「にし」と言うことに由来する。 島の道路の、クシバルと反対側の終点が、このニシハマである。海岸の南側 (今回の調査点)には比較的健康 なサンゴが多く、阿嘉島臨海研究所のサンゴ産卵調査がここで行われている。しかし今回の調査において、糸 状藻が付着した死テーブルサンゴがいくつか見受けられた。北側はダイビングスポットになっており、そこへ 向かう船が沖合を通過するので注意されたい。



マエノハマ

阿嘉島臨海研究所に最も近く、村落に面している。岸から 100m 程の位置にテトラポットの砕波堤が浜全体をカバーするようにある。

沖合 350m を過ぎてようやくサンゴの被覆度の低い根が現れるというように、一般のダイバーたちには見向きもされないポイントだが、以外に生物量は多く、特に動物プランクトン (カイアシ類やアミ類など)や、テトラポットの隙間に潜む甲殻類が目につく。また、浜に面する民家のあかりと、地形の緩やかさとが相まって、夜間ダイビングには最適のポイントである。



アゴノハマ

クシバルへ向かう道路の途中を左に折れ、舗装されていない道を下っていくとこの浜に至る。途中でけもの道のようになってしまうので、陸路からのアプローチには根性を要する。大きくえぐれた湾になっているので、 荒天時でも海面は比較的穏かである。しかしながらダイビングスポットにはなっておらず、また前述したよう に陸路からの接近も難しいため、訪れる人は少ない。

沖合 80~130m の間にアマモが繁茂している"アマモ帯"があり、稚魚が多く見うけられた。沖合 250~300m の間には巨大なハマサンゴが点在するが他のサンゴは種類数、現存量ともに少ない。

